

# 資本主義経済の先導者、「渋沢栄一」から学ぶ (その1)

2019年12月9日

西山 達夫

## 1. アジア激動の時代に生まれる

### ・アジアへ欧米列強の経済進出

渋沢栄一は1840(天保11)年、現・埼玉県深谷市血洗島の農家、父渋沢市郎右衛門、母えいとの間にも生まれた。彼の生年は明治初年から遡って28年ほど前に当たる。

幕末のこの時期は、欧米列強のアジアへの経済進出が激しさを増し、アジア諸国の社会や政治の仕組みを揺るがす「アジア激動の時代」の渦中にあった。イギリスは清国に自由貿易を強要して、1840年にアヘン戦争が勃発。敗北した清国は、イギリスに対し香港の割譲、上海ほか本土5港の開港、賠償金の支払い、不平等条約などを一方的に結ばざるを得なかった。アヘン戦争の直後から、欧米列強は日本に開国を求める動きを強めてきた。

1816(文化13)年、イギリス艦隊が琉球に来航、通商を要求したのを皮切りに、フランス、オランダ、ロシア、アメリカの船舶が相次いで日本に来航、開国を求める事態になった。

### ・開国と尊王攘夷運動

開国を迫る外国船の度重なる来航は、幕藩体制の動揺を招き、国内に危機意識が広がっていった。尊王論派と攘夷論派の両派は糾合し、後期水戸学\*の唱える尊王攘夷の思想は諸藩の改革派に政治的な影響力を強めつつ、下級武士層や豪農知識層などの間にも尊王攘夷の思潮が広く浸透していった。

\*後期水戸学：18世紀前半に藩主徳川斉昭に登用された学者、藤田幽谷・東湖、会沢安らによって主張された、強烈な尊王攘夷思想によって諸藩の改革派に大きな影響を与えたが、幕末に近づくに従って急速に指導力を失っていった。

1853(嘉永6)年に再度来航したペリー提督指揮下・アメリカ艦隊の武威に圧倒されて、幕府は開国要求の国書を受け取った。翌1854(嘉永7)年、幕府は武蔵国横浜村(現横浜市中区)において、使節ペリーが要求した、アメリカに有利な日米和親条約が調印、締結された。この条約によりアメリカ船の下田・箱館寄港、薪水・食料・石炭などの補給、下田の領事常駐が認められた。アメリカへの最恵国待遇を認め、両国の自由貿易(具体的な内容)には触れなかったが、調印後18か月以後に下田への外交官派遣の許可が規定された。日米和親条約の締結に引き続き、イギリス、ロシア、オランダとの和親条約も締結されていった。

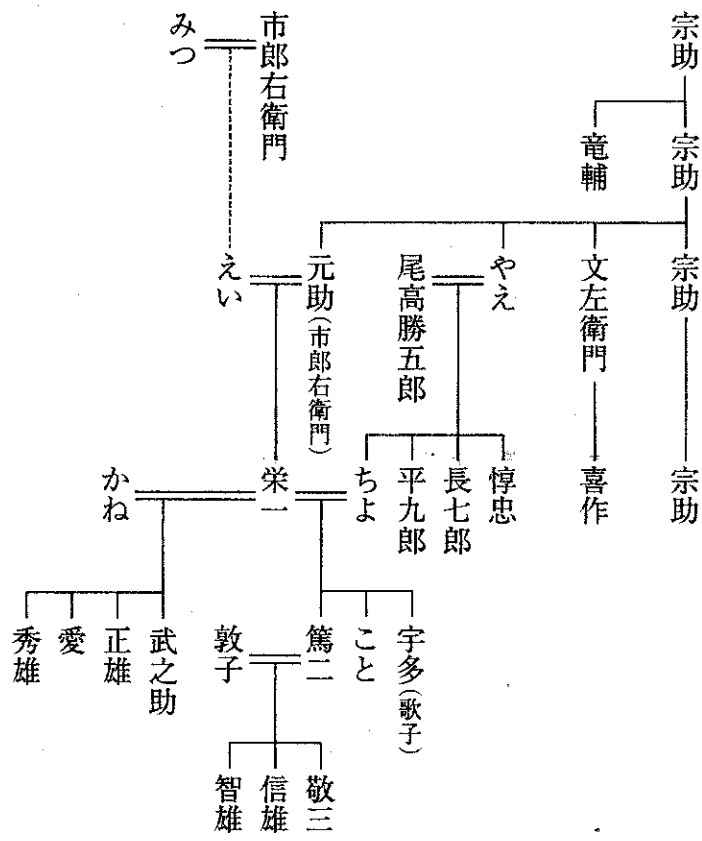
### ・日米修好通商条約の締結

1856(安政3)年にはアメリカ領事タウンゼント・ハリスが日米修好通商条約締結のため来日。翌1857年10月、ハリスは江戸城に登城、国書を渡した。老中堀田正睦まさよしは京都朝廷に上奏したが勅許を得られなかった。井伊直弼が大老に就任すると、勅許を待たず反対派を押し切って、日米修好通商条約に調印。次いで批判者に対して、安政の大獄を断行した。反対派は尊王攘夷のスローガンの下に結集。井伊専制政治反対の運動を展開し始めた。

1860(万延1)年井伊暗殺の後、幕府政権は朝廷との公武合体策に転換していった。また外国貿易に伴って生じた貨幣改鑄と物価高騰によって生活の貧苦を迫られた下級武士層は危機意識を強め、以後朝廷の尊攘派公家と呼応して活発な攘夷運動を展開していった。

すなわち経済面では、開港後、貿易の開始によって欧米と日本との貨幣制度の相違が大きな混乱を招いた。欧米における国際的な金銀比価(金高銀安)に対比して、日本は大幅な金銀高安だったので、大量の金貨が国外に流出した。この混乱を防止するため、1860(万延1)年、金銀比価(金と銀の交換比率)を国際水準に合わせる貨幣改鑄が行われた。貨幣改鑄によって通貨量は三倍に増加。1860年から67年までの間に、大坂卸売物価は3倍に跳ね上がった。これに連動して、小売物価も著しく高騰してハイパー・インフレの状況にな

# 渋沢家



フロリヘラルトと渋沢栄一

った。通貨安で生じた生活物資の物価高騰は、生活物資を通貨で買っていた多くの庶民、下級武士層を直撃して貧困を招き、打ちこわし、百姓一揆、世直し運動を頻発させることになった。

他方、1863(文久3)年の長州藩が外国船を砲撃する下関事件と、1864(元治1)年の長州藩に反撃する四国(英・仏・米・蘭)艦隊の砲撃事件とによって、攘夷の無謀さが強く認識されたことなどの理由から、攘夷運動は急速に鎮静化に向かった。攘夷運動はその後、尊王討幕に方向を転じて展開し、明治維新成立の原動力となっていった。

## 2. 渋沢栄一の出自

### ・父、市郎右衛門の家業経営

栄一の生家、渋沢家は農業、養蚕のほか藍玉\*の製造・販売、さらに質商も営む有力農家であった。多額の御用金上納を命じられる資産家で、名字帯刀を許された家柄であり、屋号は「中の家」といい渋沢姓の宗家であった。藍玉の製造販売は栄一の祖父の代に始まったと言われる。

\*藍玉：藍の葉を発酵・熟成させてできた紺色の染料「すくも」を球型に固形化したもの。

父、市郎右衛門は、渋沢「中の家」娘えいの婿養子として、実家、渋沢「東の家」から「中の家」に入り、家業に熱心に取り組んだ。彼は麦作・養蚕を営みつつ、換金性の高い藍玉製造に力を入れた。藍葉の自家栽培に加えて、近隣の藍葉生産農家からも仕入れ、それを藍玉に製造加工して、信州、上州、武州秩父方面の紺屋に幅広く販売した。市郎右衛門は家業繁盛にはげみ、実家の「東の家」に次ぐ資産を築き、質もとり金融も行うようになって家勢を挽回することが出来た。栄一はこのような士分格の上層農家の長男であり、農村の少年としては高いレベルの教育を受けることが出来た。後年、栄一は父のことを次のように記している。「もし不肖の私に多少なりとも美質があるとすれば、それは皆父の感化の賜物と言わねばならぬ」と。

### ・従兄、尾高惇忠の影響

幼少の頃は父の教えで書物を読み始めたが、父の意向により、近郷ですぐれた漢学者として知られ、栄一より10才年長の従兄、尾高惇忠(あつただ/じゅんちゅう)から論語、四書五経など読書の手ほどきを受けた。学び始めは、興味を感じる書物を繰り返し読めばよいと惇忠に諭されたことが大層有効だったと栄一は述べている。栄一は惇忠の影響を受けて、早くから社会や国政に関心を深めるとともに、青年の一時期、一世を風靡した尊王攘夷運動に傾倒することにもなった。

### ・商才の芽生え

栄一が13才の頃までは読書、剣術、習字など稽古の日々を送っていたが、父は栄一に、これからは一定の時間を家業(麦作・藍作・養蚕)と商売(藍葉買い付け・藍玉製造・販売)に当てるようにと命じた。その年は早魃で一番藍が不作だったため、上作の二番藍を多く買入れる必要があった。しかし父は信州、上州方面の得意先、紺屋まわりに出かけるため、買い付けに当たるが出来なかった。そこで義父(栄一の祖父)に買い付けを依頼し、栄一には「商売の修行に、おじいさんの供をして取り引きを見習うがよい」と申し渡した。藍葉買い入れの時期になり初日は祖父に随行して、近隣の矢島村の一、二軒で買い付けをした。栄一は、次には自分一人で買い付けをしたいと考え、横瀬村の方に自分で回って帰りたいと祖父に言って別れた。祖父から預かった金子を胴巻きに入れて、横瀬村から新野しんの村へ行き、藍葉を買いに来たと吹聴してまわった。村人は始め、子ども姿の栄一を侮って信用しなかったが、藍葉の買い付けに度々父に随行していた栄一は、父のやりとりを真似て、生産者の藍葉を見ては、これは肥料が少ないとか、乾燥が悪いとか、茎の切り方が悪いとか一つ一つの確かな品評をした。村人たちは賢い子どもが来たとか、相手にしてくれるようになり、新野村では21軒の藍葉をすべて買い付けることが出来た。それからは、栄一は近隣の村々を回って、その年の藍葉を買い集め、父から大層褒められたという。15歳頃からは自ら進んで、農業、商売の仕事に励むようになったと、栄一は回顧録で語っている。

### ・「官尊民卑」への憤りと発奮

栄一16才の頃、血洗島村周辺の有力な農家に対し、領主の岡部藩から御用金賦課が言い

つけられ、父・市郎右衛門は陣屋へ出頭を命じられた。当日、父は商用で陣屋に伺えず、名代として栄一が出頭した。栄一は代官に対し、御用金の額は承りましたが一応父に伝えて、改めてお請けに参りますと述べた。この返答に代官は怒り、栄一を嘲弄、叱責し、この場で承知すると応えよと迫ったという。栄一はこの体験から、身分制社会がもつ不条理、官尊民卑の態度への憤りを生涯忘れず、自分自身の上昇志向を強く抱くようになったと語っている。後年の「論語と算盤」に示される教訓の原点がここにあるように思われる。

一面では「農・商はばかばかしい」と思いつつも、商売の興味を深め、学習し、創意工夫に努めるようになった。栄一は、江戸で最良の銘柄である「阿波藍」に負けない最良の藍をつくる願望を持った。そこで近隣の村々の藍葉生産者から藍葉を買い集めて、「藍葉品評会」コンクールを開催して農民たちを招待。相撲の番付に似た成績表を作成、よい藍葉の生産者のランキングを発表。藍葉の出来の良し悪しで席次を定め、最良の藍葉をつくった農民を最上席に据えて受賞者を表彰し、大勢の人々を招いて饗応した。来年はさらによい藍葉を生産できるように、藍作農民の名誉心、競争心を刺激し、藍葉作りの支援を惜しまず藍作生産者の工夫と意欲を促し、品質の向上を図ったと言われる。

### 3. 尊王攘夷運動に加わる

1858(安政5)年に日米修好通商条約が締結され、幕府は自由貿易を受け入れたが、同年から翌年にかけて尊王攘夷派は激しく反対運動を展開した。栄一たちも運動に仲間入りし、10才年長の従兄、漢学の師でもある尾高惇忠を筆頭に、従兄の尾高長七郎と渋沢喜作らは共に同志となり、盛んに議論を行った。1861(文久1)年、栄一は父の反対を押し切って江戸に2ヶ月間遊学し、海保章之助の漢学塾、北辰一刀流の千葉道場に入った。塾や道場に集まる志士たちと幅広く交流して、時勢を見極めようとした。郷里に戻ってからも志士としての意識が勝ち、家業はおろそかになり父に度々叱られたという。

#### ・高崎城乗っ取り、横浜外国人街焼き討ち計画

栄一22才の時、「坂下門外の変」(公武合体、和宮降嫁を実現した老中安藤信正の暗殺)が起き、長七郎にも嫌疑が及ぶ恐れありと聞いた栄一は、中山道熊谷宿に急行。江戸に向かう長七郎を引き留め、情報を伝えて説得。旅先を変更して京都への逃避と情勢探索を兼ねて、長七郎を信州経由で京都に向かって旅立たせた。1863(文久3)年栄一23才のとき、朝廷の攘夷・鎖港の要求に応じない幕府を批判する尊王攘夷派の動きは一層熾烈になり、栄一は攘夷決行を考え始めた。尾高惇忠、渋沢喜作と三人で密議し、高崎城を乗っ取り武器と人員を奪い、横浜外国人居留地焼き討ちの計画を立てた。同年9月、栄一は惇忠と喜作同席の上で、父に対して、勘当を申し入れる覚悟で話を切り出した。天下の動乱に直面し、農民だからと安居せず、乱世に処する決意だと。それに対して父は、どこまでも本分を守って農民に安んじ、身分不相応の望みを起こさなくてもよいと諭した。徹夜の論議の末、栄一は父から一身の自由が許された。栄一は即日、事前の準備と同志を集めるため江戸に向かい半月後、郷里に戻った。その時、京都から帰って来た長七郎は、栄一の計画に反対を唱えた。1863(文久3)年8月京都で政変\*が起き、朝廷に影響力がある長州藩が排斥され、情勢が一変した。長七郎はこの事態を説明し、この計画は多くの志士たちの蜂起を促すどころか、百姓一揆程度の事件として処罰され犬死に終わるだろうと、計画の中止を主張した。両者の激論は終夜に及んだが、栄一は最終的に長七郎の主張を認めて計画は中止となった。

\*「八月十八日の政変」：長州藩は下関海峡で外国船発砲事件を起こすが、攘夷運動に同調する他藩はそれに続かなかった。文久3年8月18日、公武合体派は、攘夷過激派が主導する長州藩を京から排斥した、その政変を指す。

栄一たちの計画情報が漏洩すれば、幕府の密偵、関東取締出役による捕縛の恐れもあった。彼らは一時京都へ逃避し、政情の動きを探ることも考え合せて、文久3年11月初旬、栄一と喜作は郷里を出立し、江戸を経由して京都に向かった。両者は農民身分であるため、栄一旧知の一橋家人、平岡円四郎の留守宅を訪ね、円四郎の手配を依頼して、旅の安全策を講じた上での、一橋家家来の名義を許された旅であった。

### 3. 一橋家に仕官

1863(文久3)年11月25日、両者は京都に到着し、栄一は一橋慶喜の側近、平岡円四郎を訪ね、無事に上洛したことを報告し謝意を伝えた。それから一ヶ月ほど、在京の志士たちと交流し、幕政を覆す機会を探るなど、尊王攘夷の活動をさらに続けようとした。しかし、「8. 18の政変」以来の京都では、その機会を得るのは困難だった。そのような時、尾高長七郎から在京の栄一に書状が届いた。1864(文久4)年2月上旬に、長七郎は江戸で捕縛され、書状は獄中から送られたものであった。捕縛された長七郎の懐中にあったものは、栄一・喜作が幕政批判を書き連ね長七郎宛に送った書簡だったことを、栄一と喜作は初めて知った。長七郎の書状で、二人は気も動転し、進退に窮まってしまった。

#### ・平岡円四郎の機転と処遇

翌朝、平岡から栄一に相談があるとの書状が届いた。栄一が平岡の居所を訪ねると、幕府から一橋家\*に、尾高長七郎捕縛の件にかかわる栄一・喜作についての照会状が届いているのを見せられた。平岡は、栄一らが尊王攘夷運動に与していることを知っていたが、「この際、足下は志を変じ節を屈して、一橋の家来になってはどうか」と誘った。平岡はかねてより、一橋家に志のある人材を求めており、栄一たちをそうした人物だと評価していたようだ。

\*一橋家：徳川御三卿の一家(徳川家の親戚筋)。幕府からの御賄料で一家の財政を立てる。平岡始め主要な役人は幕府から派遣された人々だった。

栄一は「一橋家に仕官の望みがあって来訪したのではない」と応えたが、いまや進退に窮している直近の実情をありのままに伝えた。平岡は「いたずらに国家のためだと言って一命をなげうったところが、真に国家のためになる訳でもあるまい。一橋の君公(慶喜)は有意の君(才能ある前途有望の君主)であるから、仮令幕府が悪いと言っても、一橋はまたおのずから少し差別(相違)もあることだから、いささか志を慰むるところがあろうじゃないか」と説得したという。1864(文久4)年2月、栄一は一橋家に仕えることになった。最初は朝廷や諸藩との外交事務を司る御用談所下役を命じられ、昼夜を分かたず意欲をもって職務に付いた。

#### ・人材の見極めと採用

栄一は仕官当初から、一橋家は広く天下の志士を抱えるべきで、関東の友人知人にも相当な人物がいるので、人選のため自分と喜作を派遣することを平岡に進言。1864(元治1)年6月、関東派遣が決まる。一橋領知内をめぐり40人、江戸で50人を人選して帰京した。しかし関東で栄一たちが人選の最中、6月17日夜、恩人の平岡円四郎は京都で、水戸藩攘夷過激派の者に暗殺された。平岡に代わり一橋家人筆頭になった黒川嘉兵衛は、帰京した栄一たちに「足下らの志も立つように使って遣るから、必ず力を落とさずに精励したがよい」と言われ、平岡を亡くし失意にあった栄一も希望を持った。その言葉通りに栄一は身分が上がって御徒士となり、俸禄も八石二人扶持となった。

1865(元治2)年、用人筆頭として御用談所の事務を統括する黒川に随従して、栄一は諸藩との交際宴会に参加する日々を過ごす。同年2月、小十人身分(君主親衛隊の役職)に進み、御目見以上となり17石5人扶持、俸禄13両2分、下役でなく「御用談所出役」になった。諸藩の酒宴交際が頻繁に行われる職務であった。栄一はさらに貢献度の高い仕事をしなければ奉公した甲斐がないと思い、一つの企画を考えて黒川に進言した。

一橋慶喜公が禁裏守衛総督を奉名する以上、紛争危急のときに兵隊が無くては守衛が有名無実になるので、直属の兵備が重要というものであった。黒川も適切な論だと同意したので、直属兵常備の立案をまとめ、慶喜公に直接進言したいと申し出て、取り次いでもらった。慶喜に拝謁した栄一は、禁裏守衛総督の職責を全うするには兵備が必要で、まず歩兵隊を編成するべきで兵員は領地から農民を募集するのがよく、その御用を自分に命じてもらいたいと進言した。数日後、栄一は歩兵取立御用掛に任命され一橋領知がある備中(岡山)に赴いた。備中では200名余が応募。次いで、播州、摂州、泉州でも募集に成功し、全部で450名余が集まった。その後、集まった農民の兵制組み立てにも参画し、兵制と親衛隊組織の概要を整えることが出来た。

このように、栄一は通常の職務として御用談所で諸藩との外交の場などに同席するが、

それに加え自ら企画・提案して、人材を募集、採用する任務までも行っている。一橋家は徳川宗家の家族扱いで、家臣は幕府から派遣された者が殆どで、直属の家臣は少なく、組織も不備の状態であった。栄一はそこに着目し一橋家に有用な人材を見極め、直属する人々を集め、一橋家の組織強化を図ろうと考えた。しかし、それを実現するには人員を雇用し、組織を運営する資金が必要となる。

#### ・財源の確保と、創意工夫

栄一は農兵の募集に従事するために領地をめぐって、一橋家領知の収納高を高めるために、また領内の農民や市街地住民の生活も豊かにするには、新しい工夫が必要だと考えた。彼は少年の頃から生家の家業に携わって、農業栽培・加工生産・販売流通の在りようを実体験し、地域経済を洞察する目を養ってきた。栄一は一橋家の領知の地域経済の動向や産物などに強い関心を持つようになった。軍事方面の業務には自分は適任ではなく、一橋領知の経済面を整備することに献身し、一橋家の収納を増加させてみようと考えた。そこで用人筆頭の黒川はじめ他の用人に次のような三案を建言した。

#### ・領地収納米の流通整備と拡販

一橋領知の播州(兵庫西部)は良質の米産地で、収穫量も多い地域だった。その流通経路を調べると、領知の収納米は兵庫で売り捌かれていた。一橋家大坂代官が担当するが米の販売先、値段の取り決めも兵庫の蔵方に委託しているの、代官が直接監督できずに、米は安く買い取られていた。直接的に、収納米を供給先の灘、西宮の酒造家に販売するルートを整備すれば、米はより高く売れ、一橋家の収納高を改善できることが分かった。

#### ・領地産木綿の流通整備と拡販

また、播州は白木綿が多くとれる土地柄だが、一橋領知の農民は大坂で自由に藩売して一橋家では何ら関与していなかった。しかし隣の姫路藩では収穫した木綿を城下に集め、晒して大坂、江戸へ高値で販売している。そこで一橋領知の白木綿を、慣習の安値販売を変えて、高値で買い取って一括集荷し、供給先の大坂、江戸では競争に応じた価格で販売を図る。比較的安い価格にして直接に流通する方法を採用し、将来の領内の増産を目論む。

#### ・領知内採掘の硝石販売

その頃、備中では、古屋の下から硝石がとれるので、硝石を販売する家もあった。当時、海防の急務から銃砲の火薬需要が高まっていた。硝石は火薬製造の原料であり、一橋家の収益の機会になると考えた。

#### ・領知の殖産新興

1865(慶応元)年秋、勘定組頭に就任し俸禄25石七人扶持、滞京手当は月21両になった。御用談所出役は兼任だったが、通常は勘定所に勤務し自らの企画を進めた。用人たち上司は、一橋家の財務改革を栄一に担当させる内意をもっていたので、栄一は意欲的に財政全般を取り調べ、改革に取り組んだ。京都の勘定所に座して業務をするだけでなく、領知の村々に出張して、現場を指示しながら殖産興業の仕組みを整えていった。

まず備中では、硝石製造所を四か所に設置。農兵募集の際に出合った剣術家関根が硝石製造法を心得ていたので登用して任務につけ、主だった農民に趣旨を話し、奨励の元入金も出資し、生産した硝石を買い上げることにした。年貢米の販売方法については

中間マージンを抑え、利益を上げる仕組みを整え、増収に成功した。また播州の木綿反物は、今市に御産物会所(元方)を設置した。郡中の各産地に設けた会所(倉庫)から木綿荷物は、中央の播州今市の御産物会所(元方・金融)に集まり、納入した木綿荷物と引き換えに「御産物木綿預手形」(藩札・荷為替貸金)を発行して渡した。この藩札は村人の求めに応じて額面金額の正金に引き換えるようにした。藩札の信用を高め、便利な紙幣流通をはかり、金融を円滑化する意図があった。木綿買上プロセスと密接な関係を持たせた藩札発行は1865(慶応元)年秋、藩札発行手続きを定め、同年12月から発行され、翌年春から効果が表れ始めたという。

藩札の信用を保つために必要な引き換え準備の正金は、半分を今市会所に、半分を大坂御為替組22軒の主な5軒に預けて利息を取る。今市の御産物会所に集まった木綿は大坂の指定問屋におくり、問屋はそれを売り捌き、売上金(正金)は大坂川口の御産物会所納める。

その売上金はさらに大坂の豪商など確実な運用先に預けて利息を得る。また仮に、自分で直接、木綿産品を大坂で販売したいという場合には、藩札の額面を大坂で正金に替えて支払えば、木綿産品を受け取ることもできた。

#### ・将軍家茂の死去と、慶喜の将軍任命

栄一は、この間、播州や大坂にあって、これらの「モノとカネ流通の仕組み」づくりとその諸事務手順の指導を行ってきたが、業務遂行のめどが付き、勘定奉行からの命令により、1866(慶応2)年4月、京都に戻り、勘定所で業務を行う日常を過ごすことになった。

引き続いて一橋家の財務改革に積極的に取り組んでいたが、1866(慶応2)年7月、将軍家茂が21才で病没。8月には一橋慶喜が徳川宗家を相続することが布告され、同年12月に慶喜は第15代征夷大将軍に任命された。8月の慶喜の宗家相続と同時に、栄一は幕府に異動が命じられ幕臣に列することになり、陸軍奉行支配調役(御目見以下)となった。栄一は、一橋家の財政改革に意欲的に取り組んできたのだが、異動によって財政刷新への取り組みを断たれるのは「実に遺憾の事であった」と心境を記している。

#### 4. 渡欧旅行・滞在、自らの使命に確信をもつ

栄一は、慶喜の上洛に従って京都の陸軍奉行詰所で任務にあたっていたが、当時の心境を「快々として楽しまず」と述べ、処遇に対する不平不満を募らせるばかりだった。

1866(慶応2)年11月頃には、栄一は幕臣をやめて、浪人も辞さずと覚悟を決めた。そうした折、幕府目付となった原市之進に呼ばれて話があった。フランス・パリ万国博覧会開催の招待にあたり、慶喜の弟、昭武を派遣することが決まった。万国博公式行事の終了後に、フランスで留学させる意図もあり、栄一はその随行を求められた。この打診を栄一は非常に喜び、「ぜひ御遣わしを願います。」と即答したという。栄一は御勘定格陸軍付調役だったが、派遣団の経理、庶務全般を担当する役で幕府使節の随員として渡欧することになった。1867(慶応3)年1月11日派遣団は横浜を出航、上海、香港、サイゴン、シンガポール、セイロン、アデン、スエズ、カイロ、アレキサンドリア、マルセイユ、リヨンを経由して、3月7日にパリに到着した。

パリ到着後、栄一は徳川昭武のもとで書記と会計業務を行いつつ、昭武に随行して歓迎行事に参加、パリの諸施設などを視察している。ナポレオン3世主催の観劇会、大観兵式などの歓迎行事、チュイルリー宮殿の舞踏会にも参加。また大砲、機械化武器類の格納庫を見学。パリ市街地地下に入って、水道、下水道、ガス管が一括配管される地下通路を視察した。

博覧会公式行事が終わると、1867年8月6日から昭武に随行する栄一ら一団は、日本との条約締結、スイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリス各国を歴訪した。同年11月にかけて、パリに二度戻りつつ、各国を回り、ベルン、ジュネーブ、ロッテルダム、アムステルダム、ブリュッセル、フィレンツェ、ミラノ、マルタ島、マルセイユ、リヨン、ロンドンを訪れている。

#### ・自らの使命に確信をもつ

探究心の旺盛な栄一は、当時の日本とは大きく異なる光景と事物に接して様々なことを感じ取っていた。栄一は、現地での相談相手となった銀行家ブリューリ・エラールを始め、フランス実業界の人々と接触しながら、銀行とはどのようなものか、合本会社(株式会社)の経営はどのようにするのかということ、「臆気にはあったがその核心が分かった」と語っている。また経理、庶務全般を担当した栄一は、実際に為替金の受け取り、また送金で銀行を利用する機会が多かった。欧州の歴訪中にベルンで、栄一はオリエンタル・バンクで1000ポンド為替で仏貨を受け取っている。また、歴訪で滞在したオランダのアムステルダムのことを、「地勢ほぼ大坂に似たり。商估銀行なども大なるありて貿易繁盛なり」と、大坂と比較しながら感知している。初めて欧州に向かう往路の船中でも、見聞する光景から様々に関心が高まっていたようだ。使節団一行はスエズに到着したが、当時、スエズ運河は開削中であり、汽車の左手の車窓から見えたスエズから地中海までの掘削状況が、栄一の「航西日記こうせいにつき」に詳細に記載されている。スエズ運河が開通すれば、遠くアフリカ南端の喜望峯を迂回する必要がなくなり、西洋人は東洋と交易する際の利便性は比較にならない程向上する。「総て西人の事を興す。独一身一個の為にせず。多くは全国全州の鴻

(公益)を謀る。その規模遠大にして目途の壮大なる、猶感ずべし。」と記している。フランスの民営「会社」が大規模な公益事業を行っていることに感動する栄一が直に伝わってくるようだ。

パリ万博公式行事が終わった後、1867(慶応3)年11月、栄一は昭武に随行して英国に向かったが、ロンドンでは新聞のタイムズ社を視察した。1日40人の工員が2時間で14万枚の新聞紙を機械で活版印刷する状況を見学している。栄一は、報道メディアとして量産発行する新聞という存在を知り、新聞印刷の工程を現場で見た驚きから洋紙の製造・印刷と新聞発行がヨーロッパ諸国の繁栄にどのようにかかわっているのかに関心を広げた。やがて、栄一は製紙業の必要性を提唱。抄紙会社(製紙会社)の創設実現に向かうことになる。

#### ・外国で大政奉還を知る

1867(慶応3)年10月、日本では幕府が朝廷に大政奉還を行った。栄一はヨーロッパで、近代化した経済・社会の諸制度を見聞し、修得していた頃に、大政奉還の情報がフランスの新聞に報道され、日本の政治状況の記事がたびたび掲載されるようになった。

翌1868年3月頃、従兄の渋沢喜作(成一郎)から栄一宛の書簡が届いたが、書簡の受送信は順調でなく、事態の成り行きに従って、己の去就を決める他にないと心境を吐露している。「海外にあって、かかる大変事を聞いた時の心配は言語に絶した次第であった。」と述べている。1868(明治元)年11月、徳川昭武とともに栄一は帰国の途に就いた。約2年間にわたるヨーロッパ旅行・滞在を終えて横浜に到着、帰国した。ヨーロッパ歴訪の経験によって、心中自らの使命に確証を得つつあった渋沢栄一は、この年28才であった。

参考資料	日本の起業家1 渋沢栄一	宮本 又郎 桑原 功一	PHP 研究所
	雨夜譚 あまよがたり ( 渋沢栄一自伝 )	長 幸男校注	岩波文庫
	現代語訳 渋沢栄一自伝	守屋 惇編訳	平凡社新書
	論語と算盤	子爵 渋沢栄一述	角川ソフィア文庫
	その他、渋沢栄一記念財団の公開資料類		